



いし 岩石のうた・大地のうた

—— 夏 二題 ——

初夏や紫陽花咲きぬ

大理石の裸形の美女の像をめぐるて
堀口 大学「パンの笛」(1919)

詩人・堀口大学は明治25(1892)年東京の生まれ。与謝野鉄幹・晶子らに師事し、著名な詩集に「人間の歌」(昭22・1947)などの作がある。「パンの笛」は大正8(1919)年の処女歌集。昭和56(1981)年死去。

大理石は、石灰石が熱変成作用を受けた結果、構成鉱物の方解石が再結晶した結晶質石灰石のことである。大理石は、花崗岩と同様に建築石材や墓石材、造園石材などに使用されることが多い。このうち、建築石材(加工品)に使用される大理石の国内生産量は、平成7(1995)年、年間で約52万m²である。国内産の大理石(原石)は山口県美祢市大嶺町や同市於福町から産出する白大理石、及び同県美祢郡秋芳町や同郡美東町から産出する色大理石が広く知られており、これらの大理石だけで国内産大理石石材の約60%を占める。一方、輸入大理石石材はイタリアからの原石輸入が最も多く、平成10(1998)年年間で約1.1万ト(大理石石材全輸入量の約42%)が輸入されている。しかし、平成9(1997)年以降はイランやポルトガルからの原石輸入が大幅に増加しており、これら3カ国で大理石石材輸入量の約72%を占める。なお、石材以外の用途としては、大理石原石を粉碎・分級して重質炭酸カルシウム(重質タンカル)が製造される。重質炭酸カルシウムは、フィラー(充填剤)として利用範囲が広い。

閑さや岩にしみ入蟬の声

松尾 芭蕉「おくのほそ道」(1689)

貞観2(860)年に慈覚大師が開基したとされる山形県山形市の宝珠山立石寺へ参詣の折に詠まれた、著名な芭蕉の秀句。

山形市の山形盆地東部やその北方の新庄盆地東部地域の地質は、中新世～鮮新世の火山活動に伴って噴出した火砕岩類やカルデラを埋積する堆積岩などから構成され、立石寺周辺には酸性凝灰岩や凝灰角礫岩が分布する。これらの岩石の吸水率は凝灰岩類0.7-5.5%、安山岩類0.8-4.5%、流紋岩類0.3-3.7%、第三紀砂岩・頁岩0.4-4.8%、とされ(但し、岩石の風化の程度や粒度組成、基質などによりかなりの差異がある)。一方、立木の含水率は樹幹の白太で50-60%、とされ(但し、植栽地の気候や樹木の種類などにより若干の差異がある)。岩石と樹木の水分状態にこれほどの大差があれば、降雨の直後なら



山形市観光物産課・山形市観光協会発行「山寺」パンフレットから。

ばともかく、晴天下では岩石上に蝉が留まるとは考え難い。地形図を見ると、立石寺は山門から奥の院まで狭隘な谷筋に位置しているので、蝉や野鳥の鳴き声は周囲の岩盤にこだましてその反響音を増すに違いない。静寂な山肌に刺すような蝉の声。これを周囲の風景に同化させた侘・寂のこころ。正に蕉風俳諧を写す極致美の一句とされる所以だろう。ところで蝉の声といえば、かつて茨城県笠間市内を地質調査中、遠くから聞こえていた筈のひぐらしが急に行く手の林の中で一斉に鳴きだし、昆虫とは思えないそのあまりの美声に暫し聴き惚れたことを思い出す。

(次回は「秋 二題」)